

るわけでもなかったけれど、しつらえを自分で配慮し、小さな庭に、紫陽花を植えた。この居間は多佳にとって心を解放できる唯一の場所であった。慣れた文机の前に横座りすると、好きな句歌と絵に心を一つにすることができた。

「一日の営みを終えて自分の部屋と決まっている三畳に這入り、床下を流れるせせらぎの音を聞きながら枕につくと、その勞がきれいに洗い去られる」(日記から)

雨の日は居間が紗で周りを覆い包まれたように孤立し、じっと息をひそめればたちまち足もとから時空が消えた。そんな孤独に身をまかせ、わずかの無意の気分をいつまでも味わった。現実について引き戻されるかといった緊張を背に感じながら。庭の紫陽花は、いつもと変わりない冷淡な表情で、しかも揺ぎない自信で雨にうたれて咲いた。

彼女はその姿に自分を映し、ある京おんなの生きざまの典型を見ていたのであるう。

(昭和三十三年法学部卒業・京都新聞社記者)

## 同志社校地出土の埋蔵文化財

鈴木 重治



美濃天目碗 (江戸時代前期)

(同志社中学校日新館地点の江戸時代の井戸 SE 1026 より出土。口径 11.5 センチ、高 5.7 センチ、底径 4.5 センチ)

多くの茶人に親しまれている茶碗の中にも、天目碗ほど広く受け入れられているものはすくない。絵画の中での水墨画のように、東洋の心を具現している代表的なやきものであると指摘するむきもある。無駄のない形態と、単的な黒色の釉に秘められている洗練された心を評価するからである。天目の名称については、中国福建省の建

盞の釉に、斑点のあるものを星建盞といふ、星のあることによつて、天目と云うとするのは妥当ではない。鎌倉時代に中国に渡つた禅僧たちが、天目山からも帰つた建盞を、天目とよんだことが語源となつてゐる。天目碗は、もともと建盞を意味した

ものだが、いまでは黒い釉薬のかかったやきものはすべて天目と呼んでいる。

中国の出土例からすると、安徽省屯溪市の西周時代の墳墓から出土した黒釉色の釉調をもつ碗が、青銅器とともに発見されていて、黒色の釉薬の古さを示している。

日本で最初に天目碗を焼造したのは、瀬戸であり、建盞を手本として大量に生産したことは、各地の出土品や伝世品からみても明らかである。室町時代から安土・桃山時代の寺院址や集落遺跡、城館などからの出土資料をみると、茶臼や茶入などを伴つて出土する例がある。

京都での出土例のうち、安土・桃山時代から江戸時代の前半にかけての天目碗は、美濃産の天目碗が主体を占めていて、唐津などの資料はすくない。織部や志野の陶片とともに出土する天目碗のうち、井戸や石組みの貯蔵庫から出土する資料の中に優品がある。

同志社の校地から発掘調査によつて出土した天目碗は、江戸時代の公家屋敷にかかわる遺構からの検出例が多い。宝永五年(一七〇八)の京都大火の際に罹災して放棄されたものである。

当資料は、釉調をはじめ露胎部や高台の削りに美濃天目の特徴をよくそなえていて、江戸時代前期の代表例といえよう。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任